

オートフォニーへの漸進

Gradual Advance toward Autophony

ドミニク・チェン

Dominick Chen

もっとも純粹なかたちで欲望することしかしない者は、まさに意図することなく、自分がそこになんら関わることなく、欲望されたものがおのずから産み出されることを期待する^[1]。

マルセル・デュシャンの《Erratum Musical》(1913)は近代西洋音楽に不確定性を持ち込んだ最初の例として記憶される。その衣鉢を継いだジョン・ケージは40年余り後に、《易の音楽》(1951)を紡いだ。上にダニエル・シャルルが看破しているように、両者を結ぶのは理性的な「私」を無視しようとする絶え間ない努力であり、欲望だった。しかし皮肉なことに、彼らの所為が一般化するには、彼らの天才は近代西洋の系譜のなかであまりにも異彩を放ち過ぎた。この2人の「東洋人」(シャルル)は果たして、東洋そのものを具現するには至らなかった。

たとえて言うならば、ケージの標榜した世界の解像度が、それを受容する社会の分解能を大きく上回っていたということが言えないだろうか。それでは、1970年代以降の音楽をめぐる技術的な状況は本質的に変わったのだろうか。

大局的に俯瞰すれば、コンピュータを用いた作曲と演奏支援のシステムはこれまでも数多く制作され、そのアクセシビリティと参入障壁もコンピュータの廉価化に伴い大幅に改善されているといえる。しかし、どれだけ精密な音源操作が実現されようと、「音楽」というフレームワークは、私

たちの聴取の方法とともに、いまだ根本的に更新されていない。「音楽」はいまだ、それを聴く人間も含めて、作者性と技術という恣意的な領域に止まっているといえる。

ここにいる3人——**三輪眞弘/城一裕/徳井直生**——は、それぞれ異なる手法で、この問題に対して本質的な挑戦を行なっている。

三輪は西洋的な訓練を受けた現代作曲家であり、彼の編み出した逆シミュレーション音楽は計算機アルゴリズムを人間身体に付するというフレームワークである。それは一見、演奏者の身体を機械のレベルに墮する中央集権的な構造を彷彿させもするが、それこそ理知的な主体を前提とした旧い見方であると言えよう。一度演奏が始まると、ひとの構成員に帰責することのできない作動系が成される。この作動系は厳密に正答率を計ることもできるが、人間的なエラーに委ねてしまうこともできる。また構成員は作動系への貢献を繰り返すなかで、習熟を獲得し、系そのものに馴致していく。数人のグループによる十分な訓練を経た逆シミュレーション音楽の作動系は、どこに端を発し、どこで終焉を迎えるのかが判定できない。

城はオーディオ・インタラクションの研究者であり、The SINE WAVE ORCHESTRA(SWO)名義でのアーティスト活動も行なっている。なかでもSWOの参加型ライブ・イベント(Sine Wave Stairway, Continuum等)は、ちょうど三輪の身体性の追究と徳井のネットワークからのアプローチの中間層を突いているように理解できる。The SINE WAVE ORCHESTRAはサインウェーブを発する何らかのデバイスを持つ外部からの参加者をすべて構成員としてみなし、最大限の開放性を担保しながらも、全体の非常に緩やかな指揮を図っている。Continuumにおいては、参加者の入力が入力がすべて記録されることによって、いわば作品の